

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：12604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26780493

研究課題名(和文) 家庭科に対する「学習レリバンス」の構造と規定要因にみる男女共修家庭科の意義と課題

研究課題名(英文) Significance and issues of coeducational home economics from the viewpoint of the structure of relevance for home economics education

研究代表者

藤田 智子 (FUJITA, Tomoko)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：40610754

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、家庭科教育に対する「学習レリバンス」(学習にどのような意味や意義を感じているか)の構造と規定要因を明らかにし、男女共修家庭科の意義と課題を検討することを目的とする。

男女共修家庭科を学んだ大学生に対してインタビュー調査及び、アンケート調査を行った。その結果、現在のレリバンス(面白い、好き)に対しては約85%の者が、将来的レリバンス(役に立つ)に対しては約97%の者が肯定的に捉えていた。大学での専攻や性別、学習経験によって差がみられた。性別役割分業意識も強く、男性が家庭科を学ぶのは一人で生きていくためであり、共生のためという概念はみられなかった。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to examine significance and challenges of coeducational Home Economics by clarifying the structure and factors of "learning relevance (students' sense of the meaning and significance of learning)" with respect to Home Economics. Semi-structured interviews and a questionnaire were conducted with university students who had received coed Home Economics education in Japan. About 85% of the students reported that they "agreed" or "agreed somewhat" that they liked and were interested in Home Economics, while about 97% of the students reported that they "agreed" or "agreed somewhat" that Home Economics will prove useful. Students' gender, departments in the university and learning experience of home economics differs very much with respect to content. Moreover, the students' gender bias were strong and they believed that Home Economics was important for acquiring the knowledge and skills needed to live on one's own but not for living together with others.

研究分野：家庭科教育学

キーワード：家庭科教育 男女共修 学習レリバンス 男女共同参画社会 家事分担 ジェンダー

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 学習レリバンスについて

「学習レリバンス(学習にどのような意味や意義を感じているか)」は、学習そのものを面白いと感じる「現在のレリバンス」と学習が将来役立つといった感覚である「将来的レリバンス」の2つに分けて捉えることができる。「学習レリバンス」には、家族関係や教師との関係、基本的な生活習慣による差がみられ、両者のレリバンスがあった場合、男女とも継続的な学習を促進する意識が高いことが明らかにされている(本田 2004)。

### (2) 家庭科男女共修の成果と課題

一方、家庭科が1994年に男女共通必修(以後、男女共修)となってから約20年が経過した。先行研究において、男女共修家庭科の履修経験がジェンダー・イクイティ意識の形成に関連していること(荒井他 1998等)、男女共修家庭科の履修によって、高校生は多様な家族形態を受容し、自分の家族に対しても好意的な態度を持ち、家事参加率も高く、親準備性も高いこと(中西 2000等)などが明らかにされている。家庭科の男女共修には一定の成果が認められるが、家庭科に対するイメージには根強いジェンダー意識がみられる(中西 2006)。社会全体としても、依然として男性の家事育児参加率は低く、少子化も進行している。また、女性の社会進出が進む一方で、管理職に占める割合は諸外国に比べて低く、育休の取りにくさや就労継続の困難さなど課題も多い。

### (3) 家庭科に対する学習レリバンスと生活実践

家庭科は「生活に役立つ」教科と大学生に認識されているが、女子にとっては「花嫁修業・母親になる準備」として必要であるのに対し、男子にとっては一人暮らしや家事の手伝いに必要と認識されていた。家庭科の男女共修に対し9割以上が肯定的であったが、男女で考えや能力に違いがあるからこそ共に学ぶべきという、根強いジェンダー意識がみられた(藤田 2013)。だが、なぜこのようなイメージを抱くのかということは明らかに出来ていない。また、家庭科の授業で学んだ知識は親からの働きかけによって補完される一方、生徒たちが学校知を実践しようとするのを親が阻害していることも明らかになっている(藤田 2011等)。男女共修家庭科の意義がきちんと生徒に伝わり学習内容が実践されるためには、生徒がどういったことに学習の意義を感じているかを要因も含め明確にすると同時に、男女共修の意義を再検討する必要があると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、家庭科教育に対する「学習レリバンス」の構造と規定要因、さらに「学習レリバンス」と継続的な学習意欲との関連を明らかにすることである。それを通し、家庭科男女共修の意義を改めて問うとともに、生徒にとって意義のある家庭科の授業に必要な要素を検討する。

本研究の特徴は、子どもにとってより自然的・日常的な学習の感じられ方、すなわち、ハビトゥスとしての「学習レリバンス」に着目する。ハビトゥスとは、「客観的に分類可能な慣習行動の生成原理であると同時に、これらの慣習行動の分類システム」である(Bourdieu, P. 1990)。つまり、子どもたちが価値があると思う知を無意識に選択した結果が行動となるわけであるが、子どもたちが価値を感じている学校知は何か、価値を感じる要因は何かを明らかにする。教育/研究者が考える家庭科の意義や、学習指導要領に示されるような家庭科の意義が、子どもたちに伝わっているのかということは既に検証されてきた。だが、本研究では、子どもたち自身がどのような点に、学習の意義を見いだしているのかに焦点をあてる。その際、規定要因だけでなく、その後の継続的な学習への影響も分析し、家庭科の学習と子どもたちの生活の長期的なかわりについても総合的に捉える。

「学習レリバンス」という主観的変数に着目することによって、学習や学力の量的・質的実態を把握することができるほか、学習意欲の低下と学力との関係や、将来にわたる長期的な学習行動への影響を明らかにすることができる。また、「家族」に関する問題が増加する現代社会において、家庭生活について学ぶ家庭科教育の意義がどこにあるのか、家庭科教育の学習がその後の生活にどのように継続されているのかを明らかにする。

漠然とした「イメージ」として捉えてきた事象を「学習レリバンス」という概念で捉えなおすことによって、学習者が家庭科教育の何に意義を感じているかということを確認にする。その上で、家庭科の意義を認識する規定要因と、その後の学習継続欲求への影響も検証することで、家庭科が子どもたちの生活とどのように関わっていくかも合わせて検討する。

## 3. 研究の方法

男女共修家庭科を学んできた大学生に対してインタビュー調査および質問紙調査を行った。家庭科に対してどのような学習の意義を感じているかについて、その構造はまだ十分に明らかにされていないことから、まず質的にアプローチをした上で、質問紙調査によって検証する。主な質問項目は、先行研究に倣い、家庭科への学習レリバンス(おもしろ感と役立つ感)、基本的生活習慣、家族と

のコミュニケーション、教師とのかかわり、親や教師からの学習期待、家庭科の学習経験、継続的な学習への意識などである。

インタビュー調査は、男女共修家庭科を学んだ大学生に対して行い、調査人数は39名（女性27名、男性12名）である。所属は教育学部生21名（家庭科専攻10名、家庭科専攻以外11名）、その他の学部生18名である。インタビュー調査協力依頼の文書を配布・掲示し、同意の得られた人に対し1対1の半構造化インタビューを行った。調査時期は2014年11月～2015年3月である。対象者に了解を得た上でICレコーダに録音し、文字起こしを行い1次データとした。大まかな質問項目ごとに、共通するキーワードに着目してコード化し分析した。

アンケート調査は、大学での専攻による違いを比較するため、教育学部家庭科専攻、教育学部家庭科以外の専攻、家政学・生活科学部、その他の学部の4つのカテゴリーで対象者を選定した。教育学部生および家政学・生活科学部生に対しては、対象者が限られることから、大学の教員に協力を依頼し実施した。教員を通して質問紙を配布し、授業時及び個別に回収した（調査期間：2016年1月～2月）。配布数は1008名で有効回答数は946名であった（有効回答率93.8%）。主にその他の学部生に対してはweb調査を行った（調査期間：2016年2月9日～12日。有効回答数300名を目安に打切り）。メール配信数4665名、有効回答数336名、有効回答率7.2%であった。有効回答のうち、専攻又は性別が不明な者を除いた1270名を分析の対象とした。対象者の詳細は、教育学部家庭科専攻255名、教育学部家庭科以外の専攻504名、家政学・生活科学系学部231名、その他の学部280名である。

大学生を対象とした理由は、自分自身の小中高等学校での学習経験を相対化できていることと、家庭科での学びがその後の進路選択や学習意欲にどのように影響しているかを明らかにすることができるからである。

#### 4. 研究成果

##### (1) インタビュー調査

インタビュー調査の結果、以下の点が明らかになった。学習そのものを面白いと感じる「現在のレリバンス」として、調理や裁縫が多く挙げられた。自分たちで自由にメニューやデザインを決められる場合、特に楽しかったと記憶されていた。学習が将来役立つという感覚である「将来的レリバンス」としては、調理と簡単な裁縫技術が多く挙げられた。

大学生の家事実践状況は、自宅か一人暮らしかで大きく異なった。高校生までの家事の実践状況には、母親の就労形態よりも、役割として家事を割り当てられていたかが影響していた。男女が共に家庭科を学ぶことに

ついては、全員が肯定的な意見を述べた。家庭科が得意な男子は称賛の対象となっていた。男子が家庭科を学ぶ必要性については、母親の大変さや結婚後の女性の仕事を理解するため、一人暮らしでも生きていくために必要と考えられていた。生活をする上で必要、自立のために必要と語る者が多かった。

家庭科の学習レリバンスは、現在についても将来についても十分に感じられており、男性が家庭科を学ぶことにも肯定的で、男性が家庭科の能力が高いことも高評価であった。しかし、性別役割分業意識は強く、将来についても、仕事か家庭かという二者択一になりがちで、両立するのは無理（難しい）という認識であった。家庭科を学ぶのは自立（＝ひとりで生きるため）に必要な知識やスキルを身に着けるためと考えられており、共に生きるためとは考えられていないと考えられた。

##### (2) アンケート調査

アンケート調査の結果、家庭科に対する学習レリバンスについては、現在のレリバンス（好きだ）は約85%の者が、将来的レリバンス（役に立つ）は約97%の者が肯定的に捉えていた。特に教育学部家庭科専攻の学生の学習レリバンスは非常に高かったが、家庭科専攻以外の学生や、家政学・生活科学系の学生はさほど高くなかった。

学習経験は、調理実習、被服製作実習は経験者が9割以上であった。ロールプレイング、ふれあい体験学習等は経験がない者が多かったが、家庭科専攻生は経験割合が高かった。

家庭科の学習レリバンスの規定要因を明らかにするため、現在のレリバンス、将来的レリバンスをそれぞれ従属変数として重回帰分析を行ったところ、現在のレリバンスには、性別（ダミー変数）、家庭科学習経験得点、高校時代の家事実践得点、ジェンダー意識得点、将来的レリバンスには、性別（ダミー変数）、家庭科学習経験得点、高校時代の家事実践得点の影響していた。多様な領域を多様な学習方法で学んでいた場合、学習レリバンスが高いことが明らかになった。また、実際に家庭において家事実践を行っていた場合、学習レリバンスは高くなった。一方、現在のレリバンスには、ジェンダー意識が影響しており、ジェンダーバイアスのかかった意識が低いほど、「家庭科は面白い」と思っていた。性別の影響もみられ、家庭科は女性のものという意識があると、家庭科を面白いと思えないのではないだろうか。将来的レリバンスにジェンダー意識は関連しておらず、ジェンダー意識が強い人も弱い人も、家庭科は役に立つと考えているようである。

男女共に家庭科を学ぶことが当たり前となってきているが、学習レリバンスの感じ方は、性別や大学の所属による差が大きかった。一方で、学習経験によっても大きな影響を受けていた。今後、さらに学習経験と学習レリバンスとの関連を中心に分析を進め、学ぶ側

の生徒が学習の意義を感じられ、かつ男女共修家庭科の意義が伝わる授業はどのようなものか明らかにしていく。さらに、学習内容が実践と結びつく要因についても分析していく。

男女共同参画社会となり、女性の社会進出が進む一方、男性の家事育児参加率は低いままである。その結果、少子化や児童虐待など「家族」に関する社会問題は増加している。これらの問題の解決には男女が共に協力し合って生活していくことが必須であり、本研究で男女共修家庭科が有効に働く要素を明らかにすることは、問題の解決に少なからず貢献できると考えられる。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計4件)

藤田智子・古城輝海、中学生の家庭科での学びの実践状況および自己肯定感との関連、東京学芸大学紀要総合教育科学系、査読無、第68集2号、2017年、pp.319~330、

[https://ir.u-gakugei.ac.jp/bitstream/2309/147003/1/18804306\\_68\\_47.pdf](https://ir.u-gakugei.ac.jp/bitstream/2309/147003/1/18804306_68_47.pdf)

藤田智子、食に関する学校知が青年の自尊心に与える影響、日本家庭科教育学会誌、査読有、第59巻2号、2016年、pp.84~95

藤田智子、大学生の家事実践状況と母親の就業状況及び高校時代の家事実践との関連、東京学芸大学紀要総合教育科学系、査読無、第67集2号、2016年、pp.303~310、[https://ir.u-gakugei.ac.jp/bitstream/2309/144694/1/18804306\\_67\\_49.pdf](https://ir.u-gakugei.ac.jp/bitstream/2309/144694/1/18804306_67_49.pdf)

藤田智子、家事分担から見る女子大生の性別役割分業意識と親へのイメージ、東京学芸大学紀要総合教育科学系、査読無、第66集2号、2015年、pp.387~395、

[https://ir.u-gakugei.ac.jp/bitstream/2309/137886/1/18804306\\_66\\_54.pdf](https://ir.u-gakugei.ac.jp/bitstream/2309/137886/1/18804306_66_54.pdf)

### 〔学会発表〕(計7件)

藤田智子、University Students' Learning Experience of Home Economics and "Learning Relevance" Regarding Home Economics、19th ARAHE (Asian Regional Association for Home Economics) Biennial International Congress、2017年8月6日~8月10日、National Olympic Memorial Youth Center (Tokyo・Japan)(発表確定)

藤田智子、The Significance and Challenges of Coed Home Economics Studies in the Structure of "Learning Relevance" Regarding Home Economics、XXIII. IFHE (International Federation for Home Economics) World Congress 2016、2016年7月31日~8月6日、Daejeon Convention Center (Daejeon・Korea)

藤田智子、大学生の家庭科の学習経験と学

習レリバンス、日本家庭科教育学会第59回大会、2016年7月10日、朱鷺メッセ(新潟県・新潟市)

藤田智子・坂本有芳、働く女性の家事育児における外的資源の利用、日本家政学会第68回大会、2016年5月24日、金城学院大学(愛知県・名古屋市)

藤田智子、家庭科に対する「学習レリバンス」の構造にみる男女共修家庭科の意義と課題、日本家庭科教育学会第58回大会、2015年6月27日、鳴門教育大学(徳島県・鳴門市)

藤田智子、大学生の家事実践状況と家庭生活および家庭科教育との関連、日本家政学会第67回大会、2015年5月24日、いわて県民情報交流センター アイーナ(岩手県・岩手市)

藤田智子、家事分担から見る女子大生の性別役割分業意識と家族関係、日本家庭科教育学会第57回大会、2014年6月28日、岡山大学(岡山県・岡山市)

### 〔図書〕(計2件)

監修：牧野カツコ・お茶の水女子大学附属学校家庭科研究会著(全17名うち14番目、50音順)、地域教材社、アクティブ・ラーニングが育てるこれからの家庭科、2017年、159(藤田智子96~101頁執筆)

橋本美保、田中智志監修、大竹美登利編著(全19名うち17番目、50音順)、一藝社、家庭科教育、2015年、232(藤田智子98~109頁執筆)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

藤田 智子 (FUJITA, Tomoko)  
東京学芸大学・教育学部・准教授  
研究者番号：40610754